

# 子どもの貧困 ハンドブック

編著

松本伊智朗  
湯澤直美  
平湯真人  
山野良一  
中嶋哲彦

「なくそう! 子どもの貧困」全国ネットワーク

編

かがわ出版

## 児童憲章

1951(昭和26)年5月5日制定

われらは、日本国憲法の精神にしたがい、  
児童に対する正しい観念を確立し、  
すべての児童の幸福をはかるために、この憲章を定める。  
児童は、人として尊ばれる。  
児童は、社会の一員として重んぜられる。  
児童は、よい環境の中で育てられる。



### はじめに

## 貧困の再発見と子ども

### ●貧困——古くて新しい社会問題

人間の歴史のうえで、貧困は古くからある基本問題のひとつです。また、貧困にともなう不利や困難が子どもに降りかかることも、昔からある問題です。しかし、貧困を社会問題としてとらえ、政策によって解決策を考えると、それは、そう昔のことではありません。

### ●イギリスにおける貧困の再発見

資本主義の母国であるイギリスでは、19世紀の終わりごろから貧困に対する実証的な研究がさかんになってきました。資本主義の発展にともなって格差が進行し労働者の貧困が顕著になってきたこと、議会制民主主義が定着し労働者階級を代表する政治勢力が登場したことなどが背景にあります。このころから、現在の社会保障制度の萌芽が見られ始めます。

第2次世界大戦後、イギリスでは包括的な社会保障制度が登場し、これによって貧困は基本的に解決したという認識が広がります。ところが、1960年代半ばに、社会保障制度の存在にもかかわらず大量に貧困が存在することを示す研究が登場し、貧困は改めて社会的関心を集めるようになります。これを「貧困の再発見」と呼んでいます。この際、子どもの貧困は重要なテーマのひとつで、家族手当や教育的不利に対する補償教育などについて、政策的

な議論が活発になされました。本書のステップ1にある「相対的貧困」という考え方がこの時期に登場し、貧困の再発見を理論的に支えました。

#### ●日本における貧困の再発見と貧困率の公表

日本でも戦後の「浮浪児」「長欠児童」問題など、「子どもと貧困」は社会的関心事でした。しかし、1950年代後半からの高度成長期以降、貧困に対する社会的関心は低下します。厚生省（現厚生労働省）は低消費水準世帯の推計を1965年で取りやめ、2009年に相対的貧困率を公表するまで、日本は国として貧困率の把握をしていませんでした。

本書ステップ2には1980年代からの貧困率の年次推移が示されていますが、これは後から計算して公表したものです。日本は貧困率の推計をもたない、すなわち、貧困を政策課題として取り上げない、先進工業国ではめずらしい国だったのです。貧困を取り上げる研究者も少なくなりました。子どもの問題も、「豊かさのひずみ」として議論される傾向がありました。

2000年前後から、貧困に対する社会的関心が再び高まります。つまり、日本における「貧困の再発見」の時期だといえます。それに連動して「子どもの貧困」に社会的関心が集まります。この用語が広く使用され始めるのは、子どもの貧困をテーマにした出版物の刊行や報道が多くなされた2008年頃からです。背景として考えられることには、次のことなどがありました。

- 1 子育て家族の生活基盤の脆弱化の進行
- 2 就学援助受給世帯や給食費「滞納」世帯の増加、国民保険制度での「子どもの無保険」問題などが報道され関心を集めたこと
- 3 OECDによる貧困率の国際比較と「子どもの貧困率」低減に関する政策的介入効果の日本の低さの指摘

その後、日本で初めて貧困率が公表されたのは、2009年のことでした。

#### ●子どもの貧困対策法の成立と緒に就いたばかりの実践・研究

社会的関心の高まりを背景に、当事者や支援者たちの努力によって、2013年には「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、子どもの貧困問題は政策課題として認識されるに至りました。現在、多くの人がこの問題に関心をもち、子どもを支える実践活動が展開されてきています。研究テーマとして関心をもつ人も増えてきています。ただ全体としては、実践と研究の双方でまだ蓄積が浅い段階でしょう。

こうした段階で大切なことは、実践と研究の積み重ね、関係者の交流と経験の共有、社会への問題の提起、そして、これらを通して日本における「貧困の再発見」を確かなものにしていくことです。これらの動きがないと、貧困はすぐに忘れ去られ、過去のものにされるからです。

貧困の解決は、簡単なことではありません。長い時間がかかるかもしれません。でも、貧困に関心を寄せ、解決したいと思う人を増やすことはできるでしょう。それが遠まわりのようで、実は大切な一歩であると思います。

編著者を代表して 松本伊智朗

#### ●注

- 1 「貧困の再発見」の経過については、松本伊智朗「貧困研究の視角——貧困の再発見と子ども」（浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編著『子どもの貧困——子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店、2008年）をご参照ください。
- 2 浅井・松本・湯澤（編著）前掲書のほか、次のような出版物がある。  
山野良一『子どもの最貧国・日本』光文社新書、2008年  
阿部 彩『子どもの貧困』岩波新書、2008年  
湯澤直美編集代表『子どもの貧困白書』明石書店、2009年